
帰り道

青葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰り道

【著者】

Z4388A

【作者名】

青葉

【あらすじ】

幼馴染の希の転校を前に「仁は……。

その日の帰り道は切ないくらいに寒かった。

吐く息はもぢろん白いし、風だつてピコウピコウ吹いていた。

とにかく、寒くて寒くて仕方がなかつた。

「…………」

「…………」

でも、この寒さはきっと、気温や、北風のせいだけじゃなこと思う。

「寒いな…………」

沈黙を破つて、僕は希にそう言つた。

「…………うん」

希はそれだけ言つて、また俯いてしまつた。

僕が自転車を押すカラカラという音だけが、夜の道に響いていた。

「きつとさ、向こうはもつと寒いぜ。何でつたつて雪国だからな」

「…………うん、そうだね」

希がそう答えた瞬間、強くて冷たい風が僕らの間を通り抜けていつた。

希は、明日引っ越す。父親の仕事の都合で、青森に。

最初に母親からその話を聞いた時、僕は驚いたつていうよりは、信じられないつていう気持ちだつた。

希とは、幼稚園の頃からの付き合いで、所謂『幼馴染』つてやつなのかもしれない。小学校から現在中三に至るまでクラスもずっと同じ、来年受験する予定の高校も同じという正直あり得ないくらいの腐れ縁だつた。

だから、だから転校なんて、そんなこと、今まで考えたこともなかつた。

「でもさ、びっくりしたよ」

希は薄く笑いながら言つた。

「何が？」

僕は首をかしげた。

「仁が待ってるなんて、思ってもみなかつた」
希はいつも漢を令やかすように、笑つた。

だけどそれはいつも通り止手くいってはいけない

寂しさを紛らわせているような、そんな感じだった。

「たゞ一時間だよ?」の寒いの」「そこはあたしと歸つたがつたの?」

そんな風に彼女は続けたけど、そ

の笑顔は不自然なものになつていく。

いつもの僕だつたらきっと「そんなんじゃねーよー!」なんて舌

定していたかもしれない。だけど、この日だけはそうしなかった。

自然に本音を言つて、
希と帰りたかつたから、だから待つていた。

「ハハハ……。そんな素直に言わると調子狂つたりやつよな」

希は苦笑いを浮かべる。

1

そして、また静寂が訪れた。

「ゴメンね、一時間も待たせて。寒かつたでしょ？」

「……うん、そうなんだけど

希は申し訳なれそうに俯いてしまった。

「だけど、そう語ってくれてればあんなに待たせなかつたのに、

んて。

希は僕にとってただの友達で、特別な感情なんてなくて、だから

みんなに変な風に誤解されるのは嫌だったからだ。

そう、僕はこいつに 希に特別な感情なんて持っていない。
だけど何だかこんなことはもう一度と出来ないんだと思うと、こ
うしないと後悔する気がして、だから今日は希を待った。

希の文句に僕は黙ってしまったから、今日何回目か分からぬ沈
黙がまた流れた。

何か言わなければいけない気がして、何度も口を開きかけた。だ
けど、何を言つたらいいのか分からなくて、何度も口を閉じた。

「……なあ」
「……ねえ」
「……ねえ」

同時に言葉が出た。二人とも驚いて、一瞬黙る。

「お前から言えよ」
「え？ 仁から言いなって」
「別に、俺は何も……」
「あたしも、別に……」
それで会話が終わつてしまつて、また静かになつてしまつた。
こうなると、ただ僕らはとぼとぼ歩くだけだ。
それで、
「……着いたな」
「……うん」

僕と希が別れる場所に到着した。

この曲がり角を、希は右に曲がつて、僕はまっすぐ行く。
僕らは足を止める。

このままだと、ここで希とはお別れ。
別にそれがいけない訳じやないし、大したことでもない。
「それじゃ……」
「ああ……」

だけど、だけど何だかこのままではいけない気がして、こ
のまま希と別れたら一生後悔するような、そんな気がして、こ
「な、何？」

僕は希の腕を掴んでいた。

希は目を大きく開いて僕の顔を見る。

「あ……」

自分でも何故こんなことをしたのかと驚いた。

しかし、こうなつたらもう、行くしかない。

心臓はバクバクいつてるし、頭の中はパニック状態。

だけど、僕は覚悟を決めた。

「あのさ……家まで、送つてつちやダメか?」

勇気を振り絞つてこの台詞を言つた。

「え?」「え?」

希は驚いたような、そんな顔をして僕を見た。

「いや、嫌なら無理にとは言わないけど」

僕は頭をかきながら早口で言つた。

どうしてこんなこと言つてしまつたんだろう。僕は今更後悔なんかをしてみた。

きつと希は戸惑つて、困つた顔をしているに違いない。僕は希の顔を見ることが出来なかつた。

「じゃあ、お願ひしちゃおうかな」

「へ?」

思わず間抜けな声が出てしまつた。

「い、今何て?」

確認をとる。今耳に入つた言葉を僕は信じられなかつたから。

「だから、家まで送つてつて。そう言つたの」

希の顔を見ると、彼女は笑つていた。

今までのぎこちない笑いから比べるとかなり自然な、そして本当に嬉しそうな笑顔だつた。

「仁、聞いてる?」

僕はそんな希に見とれてしまつて、返事をするのさえ忘れていた。

「……あ。『い、ごめん』

「もう、仁つたら

希は呆れたようにため息をついた。だけど、その表情は明るくて、
口許も少し上がっていたようだった。

「あ、そうだ。どうせだったら……」

「え？」

「そ、入って」

希はドアを開けてそう言つた。

「お、お邪魔しま～す」

僕はためらいがちにそう言つて、中に入った。

中に人の気配はない。電気もついていなかった。

「父さんも母さんも、今晚は職場の人と飲むから遅くなるんだって
さ」

希は壁際に手を伸ばし、電気をつけた。玄関は一気に明るくなつ
た。

「…………」

何年振りだろうか、この家に来たのは。

家の間取りは、当然ながら変わつていなかつた。懐かしいな、な
んて僕はちょっとだけ感慨に耽つたりした。

「ごめんね、ダンボールばっかで」

だけど、家の中には沢山のダンボール箱が積まれていて、明日希
がこの街からいなくなるのだという事実を改めて僕は思い知らされ
た。

「別に、いいけどさ……」

僕たちは居間に入つて、テーブルに向かい合わせに座つた。

居間にはかるうじてテレビが置いてあるくらいで、他のものは

ダンボール箱以外のものはほとんどなかつた。

「お茶でも淹れてあげたいところだけどさ、そういうのも全部箱の中
でさ」

申し訳なさそうに希は頭をかいだ。

「そんなこと別に気にしなくていいから」

そうしてまた帰り道と同じ様に沈黙が訪れる、

「やうこくばせに、覚えてる？」

そのはずだつた

- 8 -

いきなりのことに僕は驚抜けな声を出しついでしね。

確か小学一年ぐらいたつたかな……

それから春には、頻りに近所の文熙館に遊びに来たり、また

語の内容に三言前の語
作りが三枚のさきの語や
二枚の前

始める希望は、終始笑顔のままだった。

で、その帰りのバスの井で「いつたまは二ヶやうとが

つたく、何でそんなこと覚えてんだよー

思い出話をするのはとても楽しくて、僕も笑いながら話す。

「泣きながら『希ちゃん助けてーーーー』ってや。もうあれは酷か

つ
た

樂しくて、

たからもう止め

「つごく」とでも渠

ヤナギノ「

「ガーネット」

胸が、とても痛かった。

僕のその一言で、希は黙に黙ってしまった。

111

さつきの言葉を僕は冗談っぽく言つたつもりなのに、彼女は俯い

てしまつている。

「お二、どうした？」

僕はいきなり黙り込んだ彼女が心配になつて声をかけた。

「」

希はじつと下を向いたままだった。

「なあ、希。どうしたんだよ？」

僕の台詞に続いて、希はゆっくりと顔を上げた。

そして真っ直ぐ僕を見る。

「……忘れちゃ、ダメなんだよ」

その声は微かに震えていた。

「忘れたくないの……」

希はそう続けた。

「……の、希？」

僕はその場から動けなくなつた。僕を見つめる希の表情は真剣そのもので、さつきまでとは一変していた。

「忘れたくないの、仁との思い出全部。全部全部、私にとつて大切な、大切な宝物だから！……

大きく息を吸つてから、希は声を荒げて一気に言つた。

僕は、何も言えなかつた。ただ何も考えられなくなつて、ただ目の前で泣きはじめた希を、正面から見ていた。

希を、泣かせたくなかつた。

泣いてほしくなかつた。

どうしてかつて？

そんなの決まつてゐる。

ずっと、ずっと前から決まつてゐる。

僕にとつて、あいつが 希が大切だから。

彼女が悲しむところなんて見たくないんだ。

大事なんだ大切なんだ大好きなんだ。

僕の中で答えが、出た。今日希と一緒に帰りたかった理由が、何もしなかつたら後悔するような気がした理由が。そして、こんなにも胸が痛くなっている理由が。

僕は椅子から立ち上がる。

希は相変わらず泣いている。

やることは、やりたいことは決まってる。

僕は希のすぐ近くまで歩み寄る。

そして、僕は希の手を引っ張る。

「ひ、仁！？」

希がびっくりして声をあげたが、僕はそのままその手を引いて彼女を立たせた。

希の目は、赤かった。顔にも涙はまだ残っていたし、呼吸も荒かつた。

そんな希を見て、僕の胸はさらに締め付けられる。

「……希」

それしか言えなかつた。肝心な時に、格好いい台詞は降つてこない。

だけど、だけどそれで十分だ。

僕は希を抱きしめた。

希の体は震えていた。

その震えを止めるために、僕はさらにきつく希を抱きしめた。

こんなのはよくある映画や小説みたいだと思つたけど、月並みな行動だとは思つたけど、僕の頭にはそうすることしか浮かんでこなかつたのだ。

「なあ、希……」

腕の中の彼女はゆっくりと僕を見上げた。それを確認してから僕

は、深く息を吸い込んだ。

これからとつておきの、一番大事な言葉を言つたために。

ありふれているけれど、まっすぐな言葉を言つたために。

今までの想いをすべてこの言葉にのせる為に、僕は深く深く、息を吸い込む。

「俺、希が好きだ」

希は何も言わずにただ泣いた。これでもかつていつくらい泣いた。その間、僕はずっと希の頭をなでていた。

優しく優しく、世界で一番大切な彼女をなでていた。彼女が泣き終わつたとき、涙でだか鼻水でだか、はたまた唾液でだか分からぬけど、僕の制服の胸の部分はビショビショになつていた。

「寒いね……」

外は相変わらず寒かつた。

「……ああ

」だけど、さつきと違つのは、

「ねえ、『……』

希が言つ。

「大好きだよ」

さつきの帰り道と違つことは、希が笑つてゐることと、

「ああ」

それと、僕らの関係だった。

(後書き)

読んでくださいありがとうございました。感想などありましたら
よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4388a/>

帰り道

2010年10月8日15時51分発行